

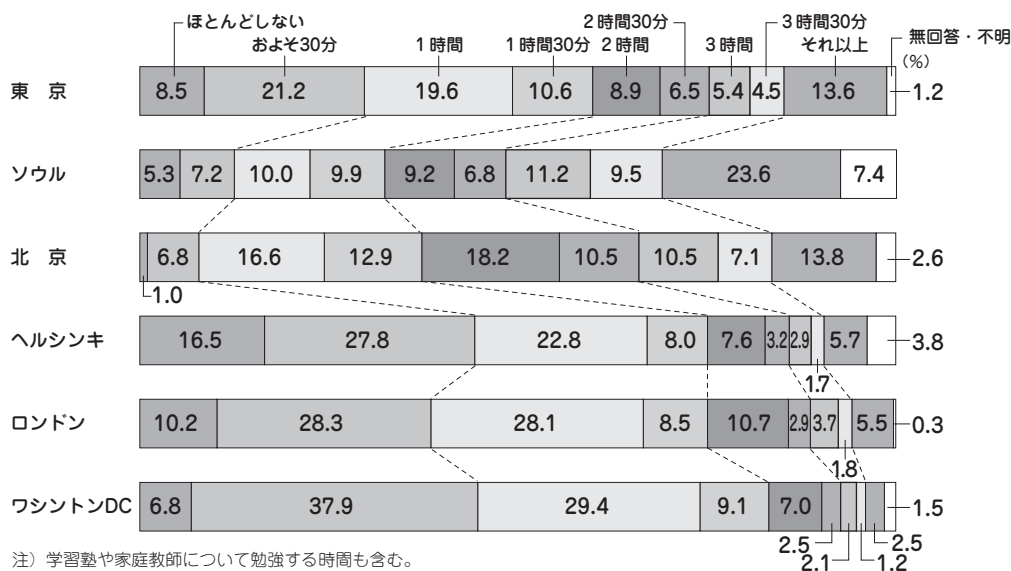
# 学校外の学習の様子

## 1. 平日の学習時間・宿題をする時間・テレビ視聴時間

ヘルシンキ、ロンドン、ワシントンDCでは、平日の学習時間を、「およそ30分」「1時間」と回答する比率が高く、学校外では1時間以内を目安に学習している。これに対して、ソウルは4人に1人が「それ以上」（3時間30分を超える）と回答するなど、学習量が顕著に多い。北京は特定の時間に集中する傾向がみられず分散している。これに対して東京は、「およそ30分」「1時間」が多い一方で、「それ以上」も1割を超えており、二極分化している様子がみられる。東京をはじめ、ソウル、北京では学習塾が発達しており、学習量が極端に多い子どもは通塾している可能性が考えられる。

**Q** あなたはふだん（月曜日～金曜日）、家に帰ってから1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間も含めてください。

図1-2-1 平日の学習時間



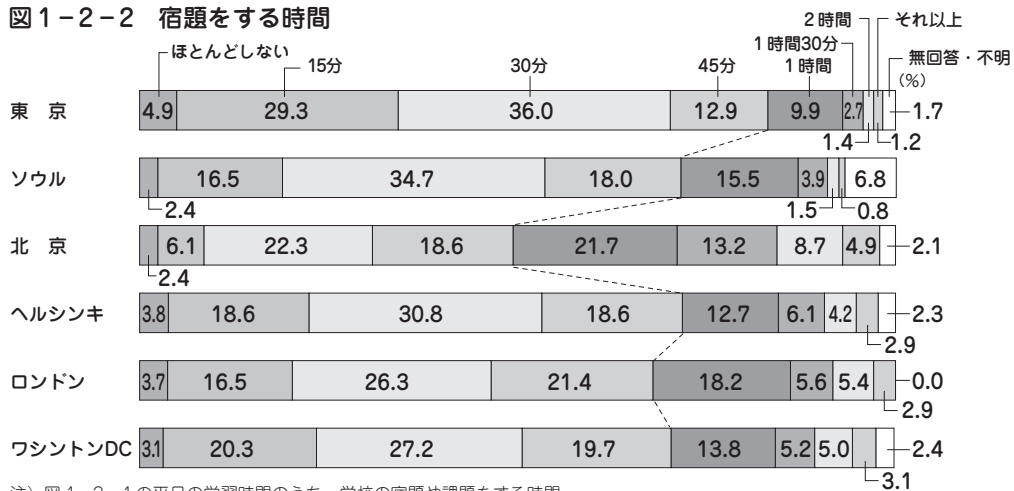
学校外での平日の学習時間をたずねたところ、「ほとんどしない」の比率は、ヘルシンキ16.5%、ロンドン10.2%、東京8.5%、ワシントンDC6.8%、ソウル5.3%、北京1.0%であり、いずれの都市でも大部分の小学生は学校外で学習している。さらに、「3時間」以上\*

学習をしている小学生は、ソウル（44.3%）でもっとも多く、北京（31.4%）、東京（23.5%）、ロンドン（11.0%）、ヘルシンキ（10.3%）、ワシントンDC（5.8%）の順になっている。総じて東アジア3都市の小学生は、長い時間学習している様子がわかる（図1-2-1）。



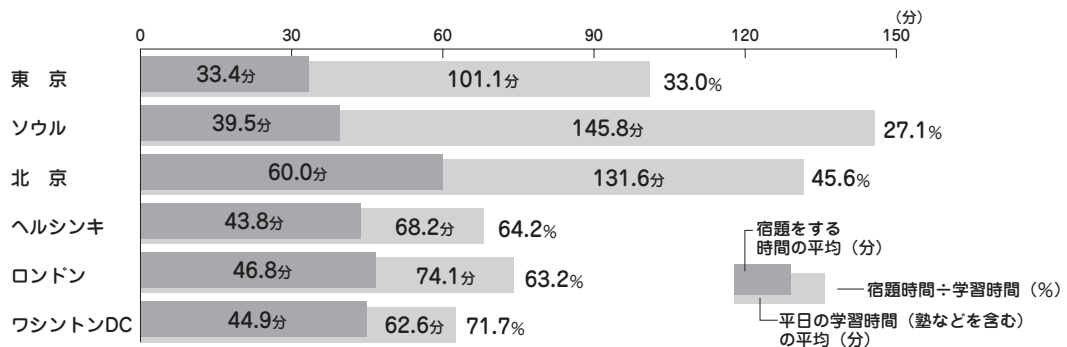
## 学校の宿題や課題をする時間は何時間くらいですか。

図 1-2-2 宿題をする時間



注) 図 1-2-1 の平日の学習時間のうち、学校の宿題や課題をする時間。

図 1-2-3 平日の学習時間に占める宿題をする時間の比率



注) 平日の学習時間の平均は「ほとんどしない」を0分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、「無回答・不明」を除いて算出した。宿題をする時間の平均は「ほとんどしない」を0分、「2時間」を120分、「それ以上」を150分のように置き換えて、「無回答・不明」を除いて算出した。

宿題をする時間は、いずれの都市でも「30分」という回答がもっとも多い。ただし、北京は「1時間」以上\*の合計が48.5%と、他の都市に比べて多い(図1-2-2)。

平日の学習時間と宿題をする時間の平均をまとめたものが図1-2-3である。学校外での学習について、欧米3都市では学校の宿題中心であるのに対して、東京とソウルは宿題以外の学習時間が長い。また北京は、宿題、宿題以外のいずれの時間も長いという傾向がみられる。

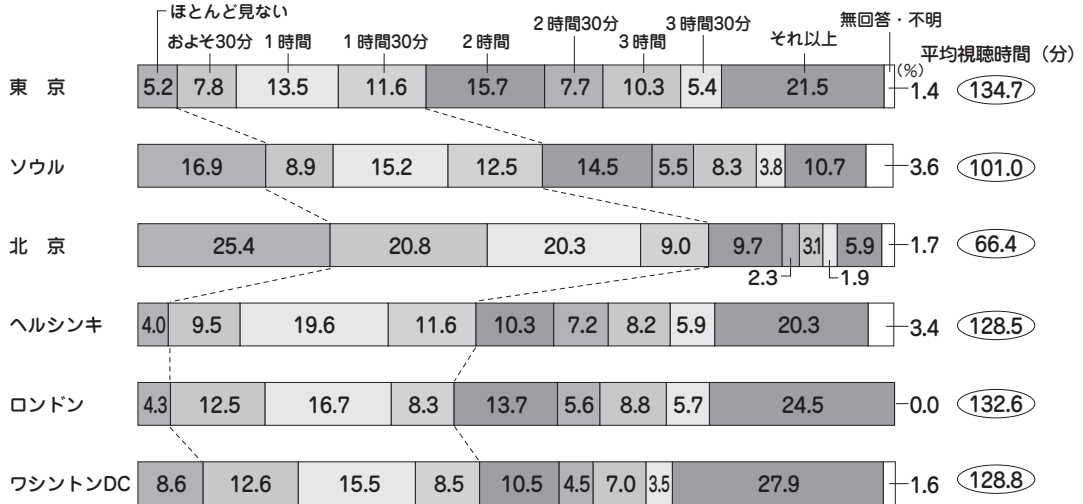
学習に対する意識をたずねても、「『勉強は

学校だけですればいい』と思う」について(p.34 図1-2-10参照)、東アジア3都市は肯定率が2~3割弱と低いが、ヘルシンキでは56.8%、ロンドンでは64.6%、ワシントンDCでは70.1%が肯定している。とりたてて学習塾に通うことなく、家庭での学習は宿題を中心にすればよいというのが、欧米3都市の状況である。これに対して、東アジア3都市は、全体的に学習時間が長い。1章2節3項でみる通塾の様子とあわせてみてもわかるように、学校外での学習が大きな位置を占めているのが、東アジア3都市の状況である。



ふだん（月曜日～金曜日）テレビを1日に何時間くらい見ますか。

図1-2-4 平日のテレビ視聴時間



注) 平均視聴時間は「ほとんど見ない」を0分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、「無回答・不明」を除いて算出した。

平日のテレビ視聴時間をみると、「ほとんど見ない」の比率は北京、ソウルで高く、それぞれ25.4%、16.9%である。これらの都市では、平均視聴時間も1時間～1時間半程度であり、学習時間が長い分、テレビの視聴時間は短い傾向にあるようだ。それに対して東

京、ヘルシンキ、ロンドン、ワシントンDCでは「ほとんど見ない」は1割に満たず、「2時間」以上\*の回答が半数を超える(図1-2-4)。

\*たとえば、「3時間」以上は「3時間」～「それ以上」の合計を示している。

## 2. 家での学習の様子

いずれの都市の小学生も、9割以上が「出された宿題をきちんとやっていく」(「あてはまる」+「まああてはまる」)と回答している。東京は、「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」を肯定する比率が、他の都市に比べて低い。東京の小学生は授業の復習や発展的な学習をあまり行っていないようだ。東アジア3都市では、学校以外でも勉強することが大切だと考え、ロンドン、ワシントンDCでは学校での学習を中心に考えているようである。

**Q** あなたは家で勉強するとき、次のようなことをしますか。

図1-2-5 出された宿題をきちんとやっていく

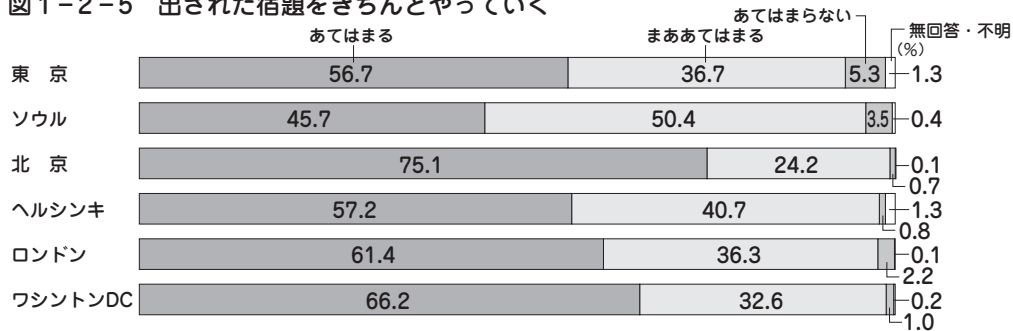


図1-2-6 授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる

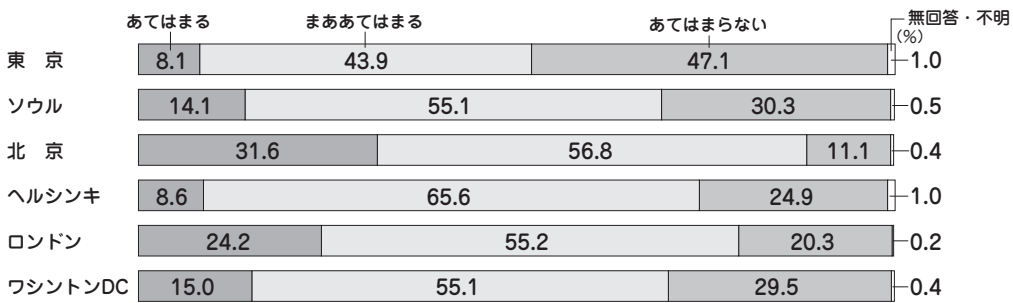


図1-2-7 授業で習ったことは、その日のうちに復習する

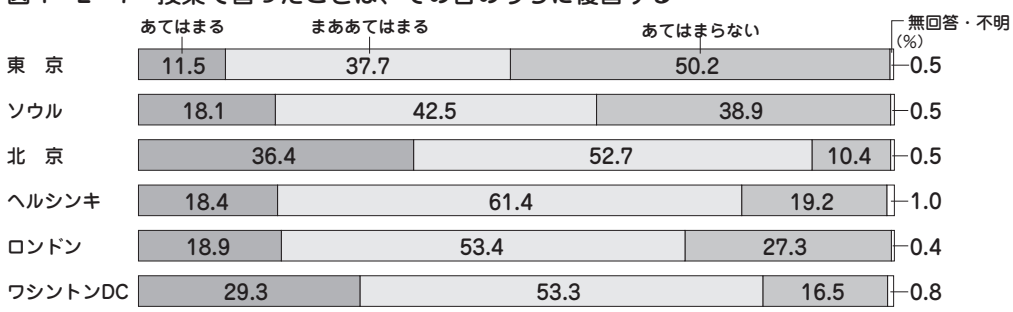


図 1-2-8 自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる

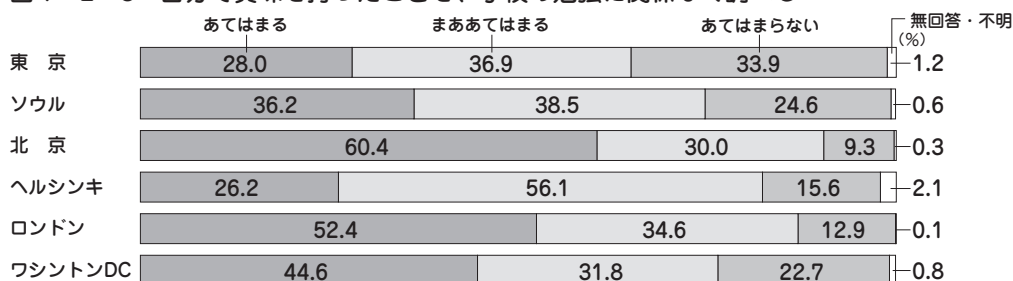
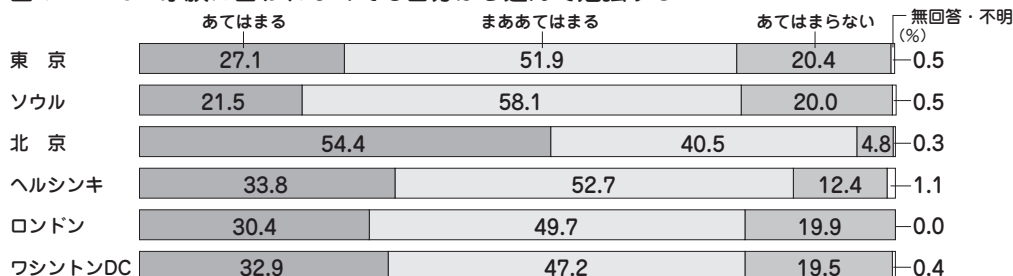
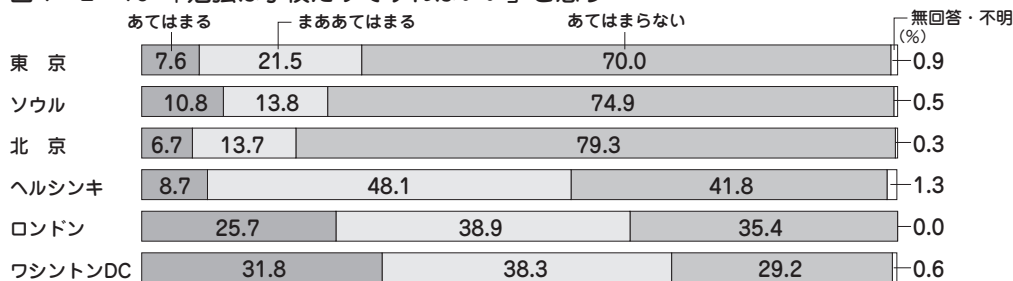


図 1-2-9 家族に言われなくても自分から進んで勉強する



注) ソウルは「誰かに言われなくても自ら勉強する」。

図 1-2-10 「勉強は学校だけですればいい」と思う



注) ヘルシンキは「学校で十分勉強をがんばっているので、家で勉強する必要はないと思う」。

「出された宿題をきちんとやっていく」について「あてはまる」と「まああてはまる」の合計はすべての都市で9割以上と、宿題にまじめに取り組んでいる。しかし「あてはまる」という回答のみをみるとばらつきがあり、北京、ワシントンDC、ロンドン、ヘルシンキ、東京、ソウルの順に少なくなっている。ソウルや東京、ヘルシンキなどの都市では学校の宿題に対する規範意識がゆるいのかもかもしれない(図1-2-5)。

「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」の3項目

の肯定率(「あてはまる」+「まああてはまる」の%)、以下同)は、北京がもっとも高く、授業内容の復習や発展学習に熱心であることがわかる。つづいて、欧米3都市(ヘルシンキ、ロンドン、ワシントンDC)、ソウルの順になっており、東京がもっとも低い(図1-2-6~8)。

「『勉強は学校だけですればいい』と思う」について、東アジア3都市(東京、ソウル、北京)は肯定率が低く、学校以外でも勉強することが大切だと考えている。これに対して、ヘルシンキ、ロンドン、ワシントンDCでは肯定率が6割弱~7割であり、学校での学習を中心に考えているようである(図1-2-10)。

### 3. 学習塾・習い事の状況

#### ①学習塾

東アジア3都市では、ソウルと北京で通塾率が7割を超え、東京の小学生も半数以上が学習塾に通っている。とくにソウルでは週あたり「5日」以上通塾している小学生は全体でも半数を超える。これに対し欧米3都市は、学校以外の民間の学習機関が少なく、そこで学習している小学生も少ない。

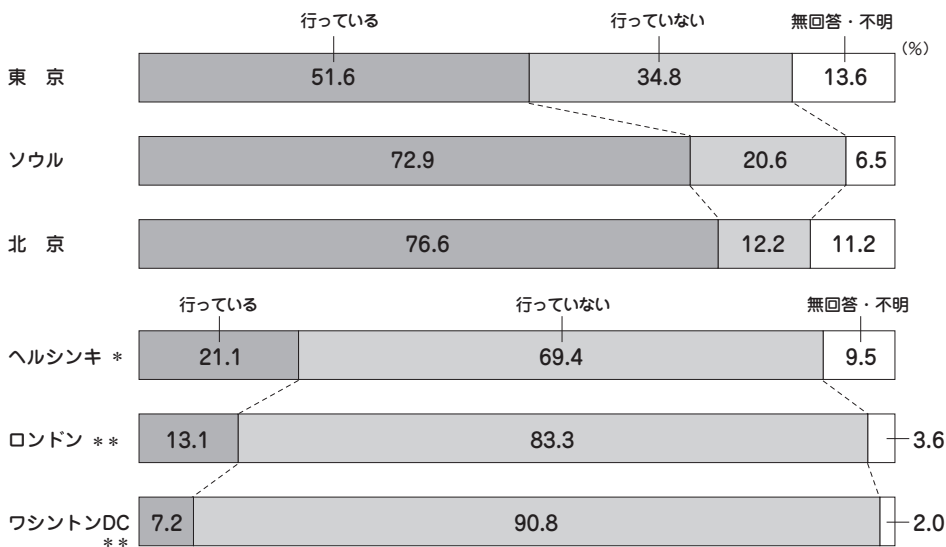


あなたは今、学習塾に行っていますか（そろばん、習字などの塾は除きます。自習教室は含めます）。

【学習塾に行っている人にお聞きします】

- 週に何日行っていますか。
- 学習塾では1回に、平均何時間くらい勉強しますか。

図1-2-11 学習塾の通塾状況



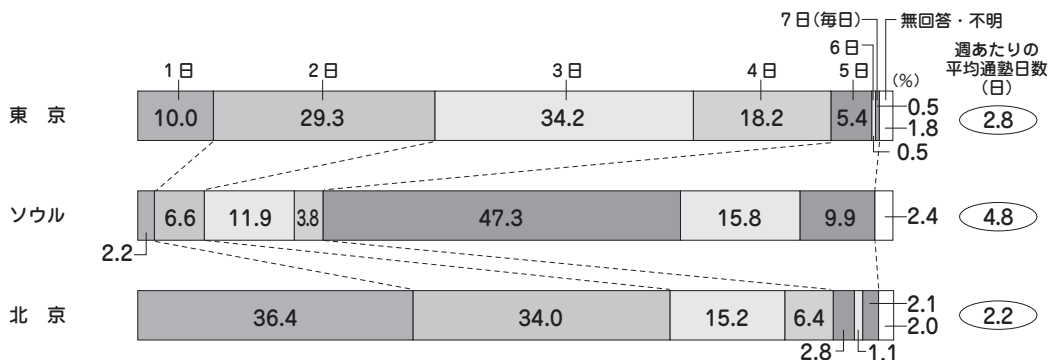
注1) \*ヘルシンキでは「学習塾」に相当する機関がほとんどないため、「自由参加の学習サークルやクラブに参加していますか」とたずねている。

注2) \*\*ロンドン、ワシントンDCでは、「何らかの学習のための学校（補習のための民間の学校）に通っていますか」とたずねている。

学校外での学習機会のうち、図1-2-11で各都市別の通塾率を示した。まず今回調査を行った欧米3都市では、「学習塾」などの民間による学習機関がほとんど存在しない、または存在してもまれなケースであった。そのため欧米3都市ではなるべく比較できるよ

うに配慮したものの、質問文を意識した。その結果、「行っている」という割合はおおよそ1~2割程度であった。東アジア3都市の通塾率をみると、東京51.6%、ソウル72.9%、北京76.6%であり、ソウル・北京での通塾率の高さが目立った。

図1-2-12 学習塾への週あたりの通塾日数と平均通塾日数（東京、ソウル、北京）

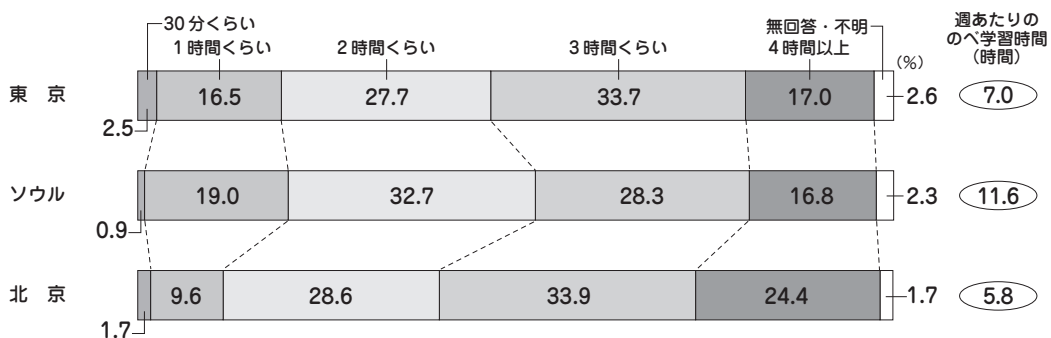


注1) 分析対象は「学習塾に行っていますか」の項目に「行っている」と回答した小学生。

注2) サンプル数は東京570名、ソウル948名、北京915名。

注3) 週あたりの通塾日数の平均は、「無回答・不明」を除き算出した。

図1-2-13 学習塾での1回あたりの学習時間と週あたりのべ学習時間（東京、ソウル、北京）



注1) 分析対象は「学習塾に行っていますか」の項目に「行っている」と回答した小学生。

注2) サンプル数は東京570名、ソウル948名、北京915名。

注3) 「週あたりのべ学習時間」は図1-2-12で算出した「週あたりの平均通塾日数」に、「1回あたりの学習塾での学習時間」の「無回答・不明」を除いたものの平均をかけあわせて算出した。

さらに東アジア3都市では週あたりの通塾日数についてもたずねた(図1-2-12)。東京では「2日」(29.3%)、「3日」(34.2%)が多く、週あたりの平均通塾日数は2.8日であった。つづいてソウルでは通塾者のうち47.3%が「5日」としており、「5日」～「7日(毎日)」の合計は73.0%を占め、週あたりの平均通塾日数は4.8日であった。なおソウルは通塾・非通塾の小学生をあわせてみても53.2%が5日以上、学習塾に通っていることになり、小学生の放課後が塾中心になっている様子がうかがえる。北京では「1日」(36.4%)、「2日」(34.0%)が多く、週あたりの平均通塾日数も2.2日と東アジア3都市の中

では低めであったが、北京では休日に学習塾に通うケースが多いことが背景として考えられる。

最後に東アジア3都市における学習塾での1回あたりの学習時間と週あたりのべ学習時間を図1-2-13に示した。3都市とも1回あたりの時間は「2時間くらい」や「3時間くらい」がほとんどを占めるが、学習塾での「週あたりのべ学習時間」をみると、東京が7.0時間、ソウルが11.6時間、北京が5.8時間となった。図1-2-12の通塾日数とあわせて考えると、ソウルは「ほぼ毎日、2時間程度」、北京では「週末に集中して長時間」学習塾に通っていると考えられる。

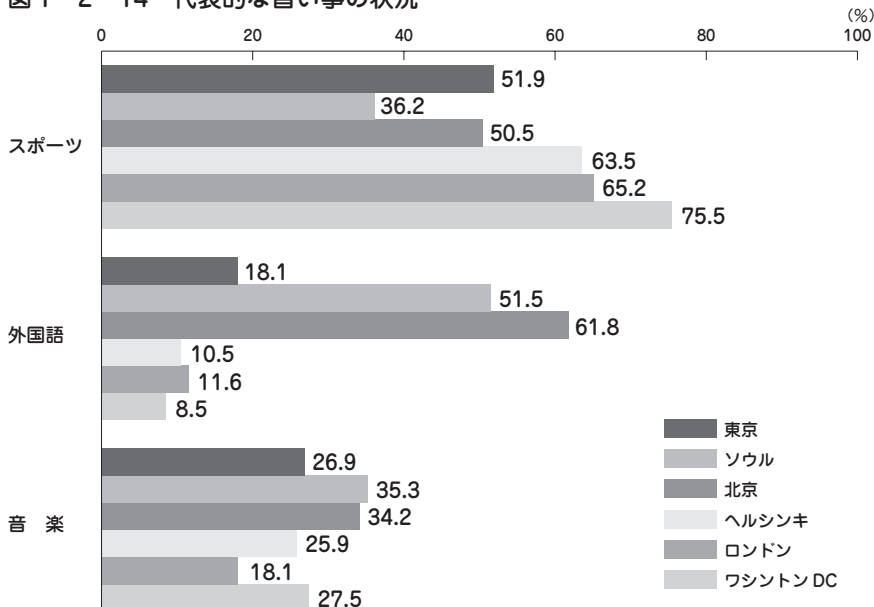
## ②習い事

習い事の「スポーツ」は欧米3都市では6～7割程度であるが、ソウルでは36.2%と低かった。一方「外国語（英語）」はソウル、北京で半数を超えているのが特徴であった。なお、いずれの都市も「何もしていない」は2割に満たなかった。



あなたは、おけいこや学校外のクラブに行っていますか。

図1-2-14 代表的な習い事の状況



注1) 複数回答。

注2) 学校外のクラブも含まれる。

注3) 「外国語」は東京、北京では「英語」として質問している。

注4) ソウル（韓国）、北京（中国）では小学3年生以上で「英語」が必修であるため、学習塾に通っているケースも含まれている可能性がある。

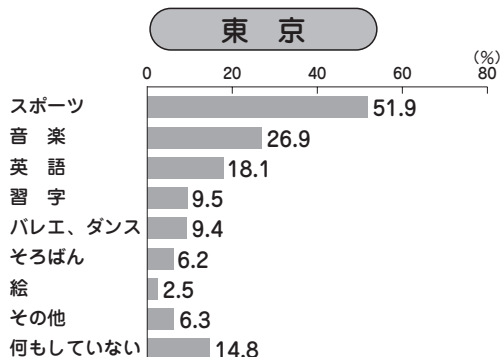
各都市の小学生はどのような習い事を行っているのだろうか。図1-2-14に、代表的な習い事である「スポーツ」「外国語（東京、北京では英語）」「音楽」の各都市での比率を示した。まず「スポーツ」をみると、欧米3都市では6～7割程度であり、東京、北京が5割程度、ソウルが36.2%と東アジア3都市は相対的に低めであった。つづけて「外国語」では北京（61.8%）、ソウル（51.5%）の比率が高く、その他の都市では1～2割程度であった。ソウル（韓国）、北京（中国）とも小学3年生以上で「英語」が必修教科であるため、学習塾への通塾も回答に含まれていることが

考えられる。「音楽」はロンドンが18.1%とやや低めであるが、その他の都市は3割前後であった。なおヘルシンキは、フィンランド語の「習い事」に相当する単語が「趣味」と同じであることから、他の都市との比較には留意する必要がある。

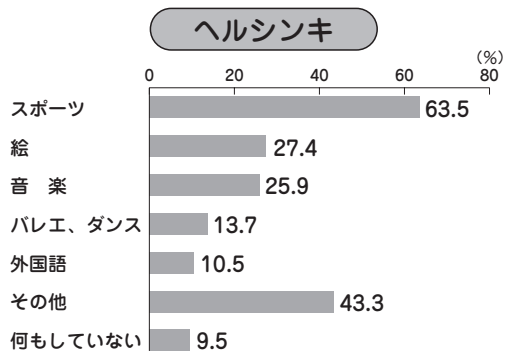
さらに都市別での習い事の状況を図1-2-15に示した。各都市での習い事のトップをみると、ソウル、北京では「外国語（英語）」、その他の都市では「スポーツ」であることが確認できる。ソウル、北京は通塾率が高いこと（p.35 図1-2-11参照）などから、習い事も学習系が中心であることがうかがえる。



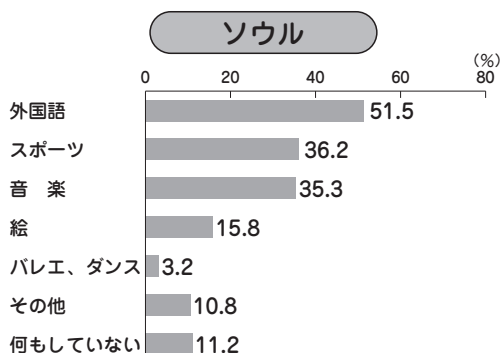
図 1-2-15 習い事の状況



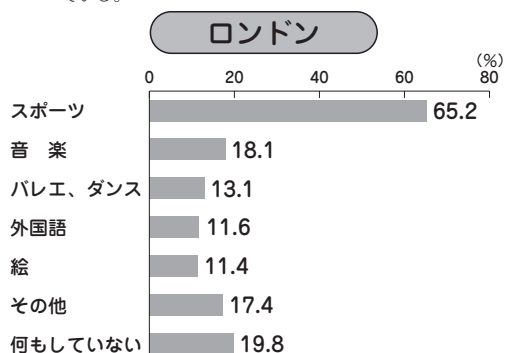
注 1) 複数回答。  
注 2) 学校外のクラブも含まれる（他の都市も同様）。



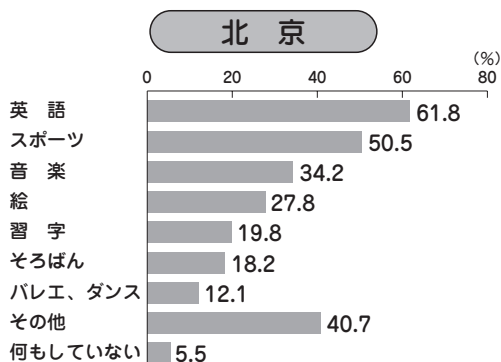
注 1) 複数回答。  
注 2) フィンランド語では「習い事」に相当する単語が「趣味」と同じである。そのため、趣味として行っている活動も含めて、回答者が広く解釈して回答している可能性がある。  
注 3) ヘルシンキでは民間の機関が提供する習い事は少ない。多くが地域を中心とする自主的なサークルが行政・公的機関、宗教団体などが提供するプログラムであり、無償で行われている。



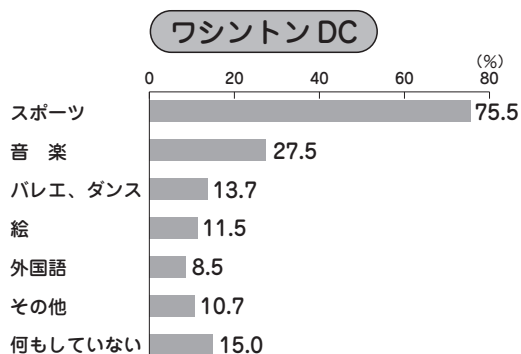
注 1) 複数回答。  
注 2) 韓国では小学 3 年生以上で「英語」が必修であるため、学習塾に通っているケースが多い。習い事の「外国語」の回答には、そのような学習塾に通っているケースも含まれている可能性がある。  
注 3) 学校が場を提供し、外部の講師を招くなどの放課後活動も回答に含まれている可能性がある。



注) 複数回答。



注 1) 複数回答。  
注 2) 中国では小学 3 年生以上（北京では小学 1 年生から）で「英語」が必修であるため、学習塾に通っているケースが多い。習い事での「英語」の回答には、そのような学習塾に通っているケースも含まれている可能性がある。  
注 3) 「その他」は、「数学オリンピック」や「作文」など、学習に関連した習い事が多くを占めていた。



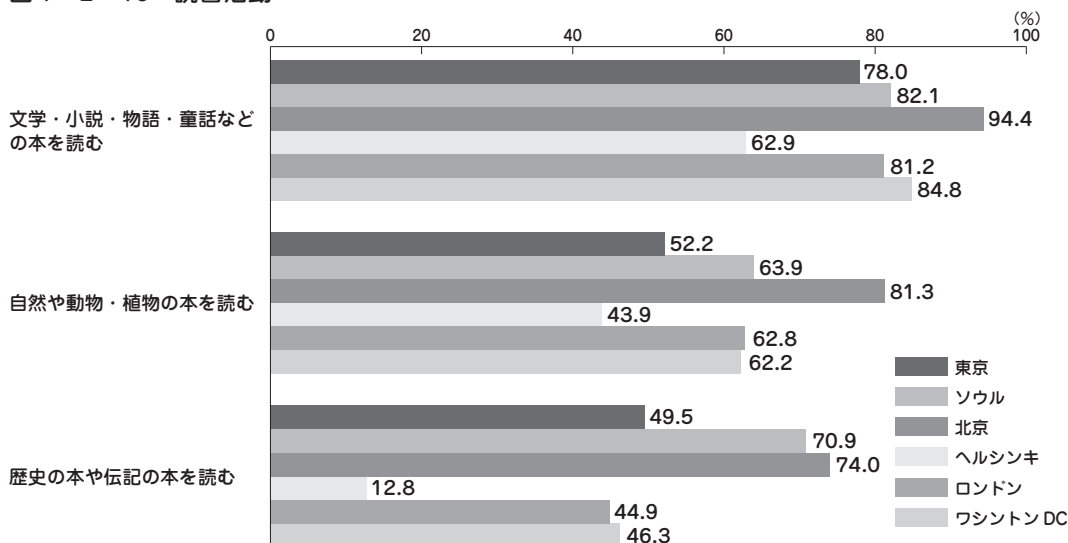
注) 複数回答。

## 4. 日常生活の中での「学習」

「文学系」の読書活動をする割合がヘルシンキを除く他の5都市で8～9割程度で、「自然科学系」や「歴史系」と比較してもっとも盛んである。その他の日常生活の中での学習機会では、動植物の世話をすることがいずれの都市でもよく行われている。

**Q** あなたは、ふだん（学校の授業や宿題以外で）次のことをどのくらいしますか。

図1-2-16 読書活動



注) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。

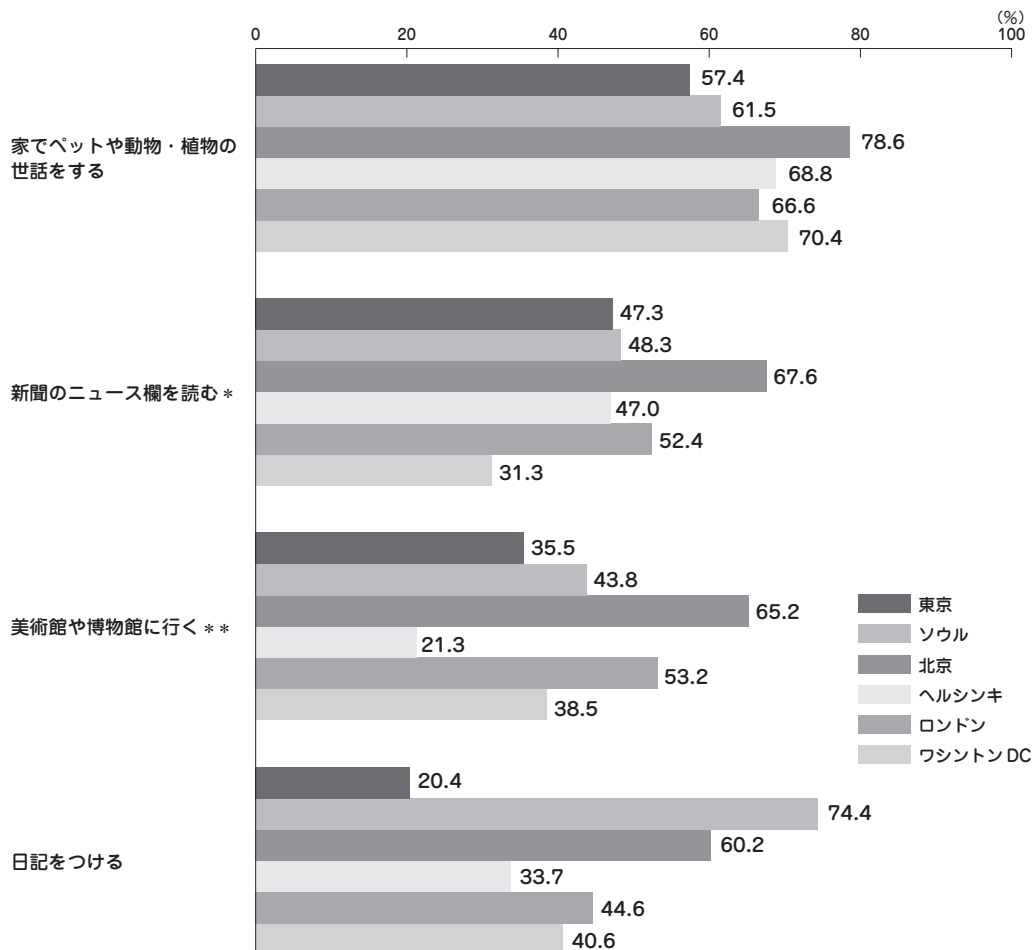
まずはじめに、日常生活の学習機会の中での読書活動について「文学・小説・物語・童話などの本を読む」（以下、「文学系」）、「自然や動物・植物の本を読む」（以下、「自然科学系」）、「歴史の本や伝記の本を読む」（以下、「歴史系」）の3つの項目を取りあげる（図1-2-16）。

全般的に比率が高かった項目は、「文学系」である。読書が盛んなのは北京で、「文学系」(94.4%)、「自然科学系」(81.3%)、「歴史系」(74.0%)のいずれにおいても、もっとも高い。それに続くのは、ソウル（「文学系」82.1%、「自然科学系」63.9%、「歴史系」70.9%）である。東京の小学生の読書活動は北京とソウルに比べると活発であるとはいえないが、78.0%の小学生が「文学系」、約半数が「自然科

学系」(52.2%)と「歴史系」(49.5%)の読書をしている。

欧米3都市でも「文学系」「自然科学系」「歴史系」のジャンルの順序は東アジア3都市と変わらない。ロンドンとワシントンDCでは、「文学系」は若干ではあるが東京よりも高い（ロンドン81.2%、ワシントンDC84.8%）。PISAの読解力で第1位グループだったフィンランドは読書大国と考えられているが、今回の調査ではヘルシンキの小学生の読書の比率がどのジャンルにおいても、もっとも低い。「歴史系」の読書をする小学生の比率(12.8%)は他の5都市の半分以下となっている。この調査結果は、フィンランド全体の読書離れの傾向を示す他の調査（Niemi<sup>\*</sup>, 2002）と同様の結果になっている。

図1-2-17 読書活動以外の日常生活の中での学習機会



注1) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。

注2) \*ソウルは「新聞を読む」。

\*\*ヘルシンキは「アートギャラリーや美術館に通う」。

読書活動以外の日常生活の中での学習機会をみると(図1-2-17)、6都市で共通して盛んなものは「家でペットや動物・植物の世話をする」で、一番比率の低い東京でも約6割(57.4%)である。「新聞のニュース欄を読む」と「美術館や博物館に行く」の比率が北京でそれぞれ67.6%、65.2%、「日記をつける」がソウルで74.4%と、とりわけ高いのが特徴的である。「日記をつける」でソウルの比率が他の5都市と比べて高くなっている背景として、ソウルでは日記が学校の課題として出されていることが考えられる。「日常生活の中

での学習」に関する質問項目では、学校の課題として取り組んでいる場合も考えられ、すべてが自主的なものとはいえないかもしれない。しかし、小学生の日常生活の中での学習機会の程度を示していることには変わらないだろう。

※参考文献

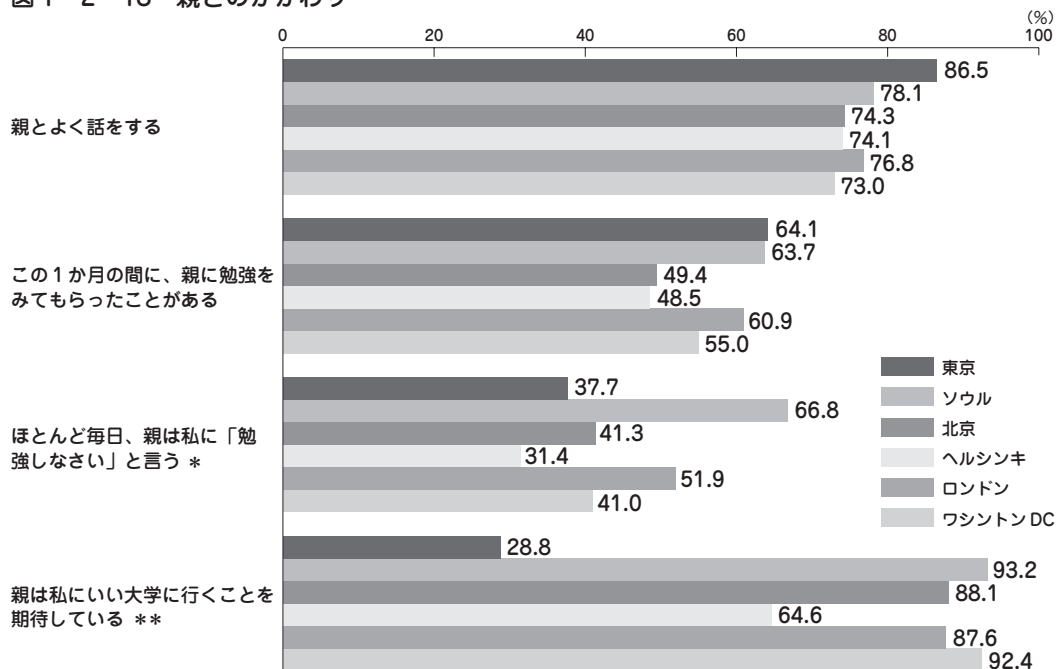
Niemi, L, Pääkköen, H. (2002). Time Use Changes in Finland in the 1990s. Statistics Finland. Culture and the Media. 2002:2. Press release:  
[http://tilastokeskus.fi/tk/tp\\_tied/tiedotteet/v2001/242kltc.ht](http://tilastokeskus.fi/tk/tp_tied/tiedotteet/v2001/242kltc.ht)

## 5. 親とのかかわり

「親とよく話をする」はいずれの都市も「あてはまる」と回答する割合は7～8割と高い。一方、「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」「親は私にいい大学に行くことを期待している」の回答比率は都市による差が大きい。「親は私にいい大学に行くことを期待している」は、東京では28.8%、ソウルの93.2%と、64.4ポイントもの差がある。

**Q** あなたの家のことについてお聞きます。

図1-2-18 親とのかかわり



注1) 複数回答。

注2) \*ヘルシンキは「ほぼ毎日、勉強するようにと親からうるさく言われる」。

注3) \*\*ヘルシンキは「親は、自分に大学へ進学してほしいと思っている」。

家庭環境をたずねる質問項目の中から、親とのかかわりに関する4項目を取りあげてみよう(図1-2-18)。「親とよく話をする」をみると、いずれの都市も7～8割となっており、親とのコミュニケーションがとれている様子がうかがえる。「この1か月の間に、親に勉強をみてもらったことがある」は、東京、ソウル、ロンドンでは6割を超え、ワシントンDC、北京、ヘルシンキでは5割前後となっている。「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」については、都市によって、ばらつきがみられる。ソウルでは、66.8

%が「あてはまる」と回答しているのに対して、ヘルシンキでは、31.4%にとどまっている。ソウルの小学生は親からの勉強のプレッシャーが強い様子がわかる。「親は私にいい大学に行くことを期待している」をみると、ソウル、ワシントンDC、北京、ロンドンは9割前後で高く、つづいて、ヘルシンキも6割を超える。一方、東京は3割を下回って、28.8%と、東京の小学生は親から勉強のプレッシャーをあまり受けておらず、親もまた子どもの将来の学歴にそれほどこだわっていない様子がわかる。